

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



さるすべり
白露に咲く百日紅

(9月7日 大教会神苑で)

※白露…二十四節気の一つの日。これから秋の
気配が深まっていく。今年は例外かも……。

教祖130年祭に向かって

成人目標

おつとめ奉仕人の増員

立教175年
9月号



講師の話を熱心に聞く参加者

よふぼく勉強会開催 テーマは「時旬」 8月月次祭後

育成部(吉岡壽部長)では8月21日、大教会8月月次祭後、会議室で「よふぼく勉強会」を開催、30人が参加した。今回のテーマは「時旬」。

講師の佐藤道孝先生は「真柱様は教祖120年祭の年の秋季大祭後の神殿講話の中で『教会の常時の活動はおつとめと布教であります。―中略―おつとめによって親神様、教祖にお勇み頂き、世の治まり、よろづたすけのご守護を願うことが教会の第一の使命であります。そのためには―中略―おつとめ奉仕者の数を揃えるための努力が欠かせません』とお諭し下さいました。

これを受け大教会長様は、教祖130年祭には全部内教会が一名以上のおつとめ奉仕者の増員を打ち出されました。秋の大祭に合わせて論達のご発布の準備が進められている中、ある週刊誌の『人を救えなくなつた現代宗教』という記事を見て衝撃を受けました。我々よふぼくの手の差し伸べ方の足りなさへの反省と、奮起を促される天の声と受け止めさせて頂きました。

芳井分教会の教祖120年祭活動の最中の自教会の神殿移転建築。また『人を救ける心は誠一つの理で、たすける理が救かる』というお言葉に感動し勇み心で歩ませて頂いたことが先日のように思い出されます。同じ頃、我家のいんねんを次から次へとお見せ頂きました。身上、事情からにいがかりご守護頂かれて、現在も教会に住み込んで通っておられる方もあります。

教会での生活の中ではいろんなことがあります。よく思索すると、お世話をさせて頂いている

様に見えても、実際は私達が救けて頂いているのだと感謝しています。自分の出来る布教としてこれからも教会家族というおたすけを通し、おつとめ奉仕者の増員のご守護につながる様、つとめさせて頂きたい」と自身の布教体験を通し、教祖130年祭に向かう時旬の角目を話された。

引き続き、同テーマについての質疑応答が行われ、参加者は熱心に受講した。

勉強会に先立ち月次祭終了後、神殿で同部おたすけ掛員より一人におさづけが取り次がれた。

同勉強会の詳細については本誌『かさおか』8月21日号参考。

立教175年 こどもおぢばがえり 帰参者

参加者 1, 392人
(昨年 1, 292人)
未帰参教会 23ヶ所
(昨年 18ヶ所)

あらきとうりよう

入門塾開催

青年会笠岡分会(上原明勇委員長)では、8月15、16日と『あらきとうりよう入門塾』を開催した。初日は受付後、高校生の参加者・青年会スタッフ共々に、まずは腹ごしらえ。焼肉を囲んで、会話も弾んだ。夕づとめ参拝後、大教会長様から、「親神様とはどんな存在か」などの内容のお話があり、



協力しながら組み立てる



また来年も参加するぞっ！

一同真剣に聴き入った。翌日ひのきしんの後、委員長より、「あらきとうりよう」の意義の説明や、今後の行事についての勧めがあった。

続いて、ミニ四駆(モーターで走る四輪の玩具)大会を開催。高校生、スタッフが、それぞれに車種や改造パーツを選び、組み立てていった。高校生には馴染みのないミニ四駆。スタッフが手を貸しながら、楽しんで完成させた。大会は、車の速さ、見た目、ボーリングのピン倒しなど、6競技

の総合点数で競われた。参加者は、入門塾を通して交流を図り、青年会行事に親しんだ。

今回の参加は5名。うち3名が未信者家庭の高校生であった。動員の面などに課題が残ったが、今後の行事にしっかりと活かしていきたい。

(青年会副委員長 上原 繁次)

女子青年の集い開催

本部女子青年大会に向け

婦人会

婦人会笠岡支部(上原きよ子支部長)では8月19日、大教会で女子青年の集いを開催、167人(女子青年87人・婦人会員ら80人)が参加した。

来年、11月4日、本部で開催される第27回女子青年大会に向けての参加の呼びかけと会員の親睦を目的に行われたもの。

午前10時から始まり、まず七交替で十二下りのおつとめまなびをつとめ、続いて上原きよ子同支部長が挨拶。引き続き会員2人が感話。

婦人会手作りのバイキング形式での和やかな昼食のあと、女子青年によるアトラクション、十全のご守護の拝読、ハンドダンスなども行われ、楽しいひと時を過ごすと共に、本部女子青年大会には一人でも多くの参加者と別席者のご守護を頂くことを誓い合い午後2時20分閉会した。

サマーキャンプ実施

8・22～24 大教会境内地で

少年会

少年会笠岡団(武内正美団長)では8月22日から24日まで2泊3日の日程で大教会境内地を使用して「第15回野外錬成会・サマーキャンプ」を実施、48人(少年会員30人・育成会員18人)が参加した。若年層の育成を目的に、対象は小学校3年生から中学校3年生までで、高校生以上はスタッフとなり行った。

真夏の最後を飾る少年会恒例行事『サマーキャンプ』を今年も楽しく終えました。新しい団長の元を集結した委員のメンバーには女性が多くその特色を十分に活かしたキャンプは、30名余りの少年会員とスタッフ20名で初めて大教会境内地をお借りしての開催となりました。『大教会でするなんて…ちょっと…、ノリが悪いかな…』と思っていた私ですが、テントサイトを神殿前北側駐車場の芝生の上にはり、神殿北側と浴場棟の日影にメイン広場とかまどを設置して、境内地を存分に使って肝だめし、ウォークラリー、水鉄砲ゲーム大会、また、福山市営メモリアルパークでの水泳といった充実した内容で、日頃の生活より不自由があるもののぞんぶんに楽しんでもらえたよう

す。大教会は、設備が充分整い、緊急時の対応にも応えられ安心して行事が組みました。新スタッフには、少年会本部出身の女性が二人、研修生が一人、好奇心旺盛のアフリカンの方、神石高原町の関西芸人系の方、重機に乗って30年の方、看護師さんが集まり、二日目のキャンプファイヤーでは、新委員達が火の神、水の神、風の神を熱演してキャンプを喜ばせました。

なかでも料理コンテストでは、各班が一人300円の予算で食材の買い出しから始め、スタッフの知恵を借りながら創意工夫を凝らして「味」「見た目」「総合評価」を競いました。合計点で優勝したチームは、チャーハンと豚ケチャップ(見た目では豚キムチのまんま！)餃子スープ、デザートにチョコイスケーキでした。

更に多くの皆様にご参加下さることを委員一同心よりお待ちしております。

(笠岡団副団長 藤井正仁)

楽しかったウォークラリー

芳井分教会 佐藤こみち

わたしが、一番楽しかったのは、ウォークラリーです。ウォークラリーは、笠岡大教会のしきちの中に、10かしよに問題がかくしてあるので、グループに分かれて問題をといいききました。



大教会の自然を満喫した2泊3日

その中でも一番わたしがおもしろいと思った問題は、3つあります。一つめは、かえるの歌のりんしょうです。かえるのりんしょうは、わたしたちのグループが一番じょうずだとスタッフの先生がいていたのでうれしかったです。二つめは、大きな木の上にモールがひっかけてあるのでそれを木にのぼるとるといいうルールです。でも高い所のほうが点数がたかいので、しほちゃんが一番のぼってとつてくれました。3つめは、かくしポイント探しです。食堂の前の倉庫の間にあったので私が見つけました。



課題をクリア！ウォークラリー

キャンプで一番楽しかったこと

亀田山分教会 竹田 ちえみ

8月22、23、24は、おかしのかさおか市の、大教会の庭でキャンプをしました。新しく友だちもできました。

キャンプファイヤーでの出しものは自分のチームの司会をしました。きんちようしたけど最後まで出来てうれしかったです。来年は優勝したいです。

一ばん楽しかったのは、きもだめしや、プールでした。きもだめしは木が「ごそごそ」と鳴ったりにおにや口さけ女にゴリラが出てきてこわかったです。プールは深いプールだったので、うきわをもっていきました。プールでは、ウォータースライダーを、四回すべりました。そのあと、10メートルのプールに入ったら気もちよかったです。あと、深さもちよよかったです。またキャンプに行きたいです。

キャンプで楽しかったこと

亀田山分教会 竹田 佳代

大教会の庭で料理コンテストをしました。カレーライスといちごのヨーグルトとヨーグルトとぶどうとバナナを使ったデザートを作りました。その結果、見た目は四位、味は2位、そう合得点は1位でした。けつきよく、1班は2位でした。とてもうれしかったです。

プールにも行きました。たきさんおどりをしてから、深いプールに行きました。うきわは使いませんでした。泳げるから必要ないと思いました。ふつうのスライダーとは、ちがいました。スピードが早くておわりそうになったときに水がジャポーンという音がしました。スライダーは2回乗りました。楽しかったです。また行きたいです。

全日本トッチボール選手権

決勝トーナメントで惜敗

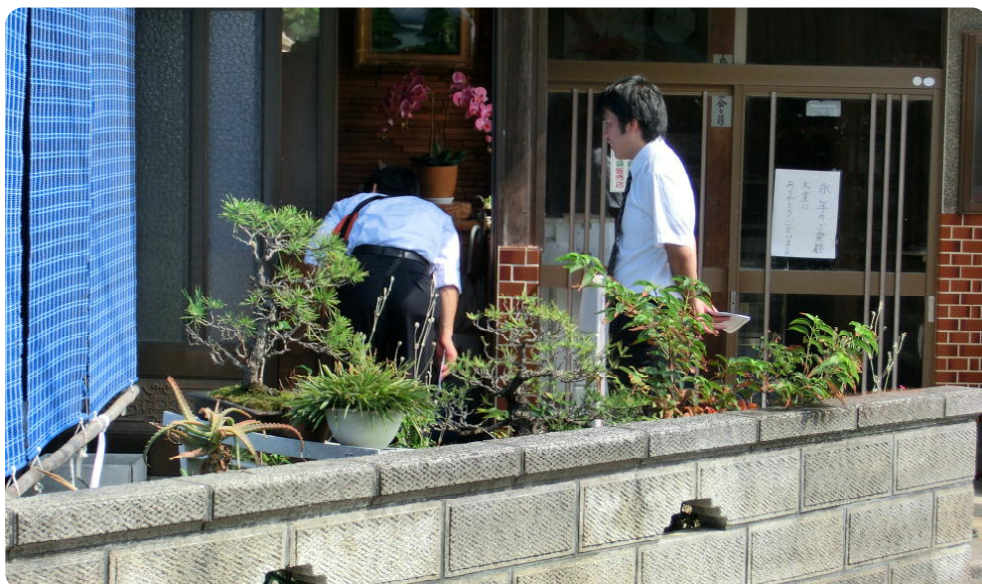
里庄レッドスネークス

本誌「かさおか」8月21日付号で紹介した森本善修君(海松ヶ岡分教会長、森本忠善さんの三男)が所属する里庄レッドスネークス(岡山県代表)は8月12日、大阪市此花区「舞州アリーナ」で行われた第22回全日本トッチボール選手権大会に出場。

予選トーナメントは、普通寺クラブ(香川)を8-7、城内キッズ(静岡)は8-1、メタルドラゴンズ(東京)を10-8の2勝1敗で1位通過。決勝トーナメントに駒を進めた。

決勝トーナメントでは、高須ドラゴンズ(広島)と対戦。8-9の僅差で惜敗した。

森本君は「初めての全国大会で緊張した。日本で48チームしか出場できない貴重な大会で、チームの皆とカラーコートの上で戦えたことは一生の思い出です。大会後、6年生の引退にあわせてポジションも変わったので、気持ちを切り替えて自分の役目を果たしたい。大会を通して得たものは勇気。全国制覇目指して練習や試合に勇気をもって戦っていきたい」と今後の抱負を話した。



一軒一軒丁寧に訪問

青年会全分会布教推進週間

各地で勇む、あらしきとうりよう

青年会笠岡分会では、9月2～9日の『全分会布教推進週間』期間中、各分会、ブロックで、神

名流し・戸別訪問・路傍講演・ひのきしんなど、様々な活動を展開した。(集計は10月に発表)

その中、委員が中心となるキャラバン隊の活動として、大教会、府中市分教会、久松分教会、福山分教会、海松ヶ岡分教会(活動日順)を拠点に、それぞれの街で神名を流した。また、9月3、4日と島根方面(島根分教会・亀田山分教会・米府分教会・多古浦分教会)にも赴いた。9月3日は、雨と風が強かったが、亀田山分教会から松江駅前まで神名を流した後、街頭に立ち、道行く人に自らの信仰を熱く語った。

(青年会副委員長 上原 繁次)

まず布教部員が先頭に立つて!

全教一斉にをいがけデーに先立ち

布教部(田中隆之部長)では9月3、4の両日、同部員12人が参加して福山、府中、岡山方面でをいがけ活動を行った。

これは青年会が布教推進週間(9月2日から9日)の初日、山陰に向け出動したのを受け、9月28日から30日まで実施される「全教一斉にをいがけデー」に先立ち、まず布教部員が先頭に立つて行動を起こし、秋季大祭での「論達」発布に向け布教活動に弾みをつけようと呼びかけられたもの。

3日、午前10時、福山分教会に集合。JR福山駅



街頭に立ち路傍講演する布教部員

まで神名流しをし、駅前参加者を4人ずつ4班に分け路傍講演、パンフレット配布を行い、午後からは府中市分教会を拠点に神名流しをした。

4日は8人が参加。照陽分教会からJR岡山駅まで神名流しをし、駅周辺での路傍講演の後、大教会で解散した。



婦人会員らの手によって
てきぱきと作業が進められた

毛布襟付けひのきしん

婦人会

婦人会(上原きよ子支部長)では9月3、4の両日、婦人会員ら107人が参加して詰所宿泊者、大教会信者室用の毛布襟付けひのきしんを行った。
3日は午後1時から2時半ごろまで行い26人が参加。4日は81人が参加し午前9時半から講堂、信者室に分かれて行い午前中で終え、昼食後に解散した。

こころの詩

▼天理教道友社発行『天理時報』、「時報歌壇」・「時報俳壇」より転載

▽笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

8月26日付 海松ヶ岡分教会 池田広子さん

日焼けした若者たちが降りてくる
海水浴の船着く港

芦品分教会 金谷眞佐代さん

最高の人生だったと言ひ残し

親孝行な弟が逝く

海松ヶ岡分教会 藤井光子さん

子つばめが巣立ち始めぬ五、六羽が

飛ぶ練習を低き空にて

海松ヶ岡分教会 石川泰子さん

忘れたい忘れたくないこの思い

遠くすぎたる終戦の日を

9月2日付 備中分教会 塩飽利子さん

思うまま闇の深さに飛ぶ堂

▼養徳社発行『陽気』誌九月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「目」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていきましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

佳詠 東悠分教会前会長夫人 田林美智子さん

目に見えぬ縁ぞ神の差配なる

芦品分教会 金谷眞佐代さん

目標をめざす道すじまっしぐら

▼表紙写真 (友井道弘かさおか編集部員)

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介 ③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事等々

字 数

1000字前後(800字~1200字) 題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は一句からでも結構です。

寄稿先

下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：tenkasa@yahoo.co.jp

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



温故知新

いきいきエピソード 17

岡本久作先生の事

岡本先生は玉島初代・岡崎軍治先生の甥である。笠岡二代会長の懇望で笠岡の入り込み役員としてご苦労下さる事となった。明治34年10月の事である。先生の一番大きなご苦労は神邊の教会の負債整理であった。明治36年6月、当時出張所であった神邊に監督教師として派遣された。出張所の負債一千円と部内布教所の負債整理の為であった。

この頃の状況を神邊分教会史には次のように記している。

岡本は2年程笠岡から通い、その後所長不在の神邊出張所へ入り込み種々画策したが、そう簡単に建て直しはならなかった。(長坂二代所長は敢然すべてを擲なげつておたすけに奔走する人であったが、いつこくな性格でなかなか役員諸氏と心を合わせて事に当たる事ができにくく、この頃ほとんど教会に姿をみせなくなっていた。)所長不在の為、役員達も借金先に対して面目ないという事で、教会へ出入りするのを遠

慮するという具合で、遂に教会には岡本のみが滞在する事となった。しかし役員達も何とか返済しなければと、明治37年には、桑田音吉、桑田嘉助、藤井九右衛門、岡本吉次郎らが呉市に出て働いた。これと前後して上下布教所から大本猪助、吉岡和太郎、府中市布教所から植田伊三郎が同じく呉市に出て働いた。また東城布教所の笹尾亀満の子息・笹尾奎太郎も呉市にでたが、後大阪に移転した。なお上下布教所は神邊の上を思い、新築した教会建物を抵当に入れて運んだ。こうした努力にも拘わらず、負債は利息が加算されて一千円余から三千五百円余までに膨らんだ。岡本の苦心は筆舌に尽くし難く、中には「役員を相談づくで稼ぎに出したのであるから、負債はあなたから支払って頂きたい。出来なければ教理を説いて下さるな」という者もあつた。このため遂に神邊の教会建物を処分して不足額を篤志家、藤岡嘉七、目崎伝右衛門、田辺金二良らに仰いだ。

又当時、笠岡初代会長が神邊、府中方面に巡教のとき、次のようなエピソードが笠岡分教会史に載っている。

神邊を出る時岡本氏は「旧長さん(初代会長の事)、今日はチト寒いからお粥を炊きました」

といつのまにか神前の洗米を下げてお粥を炊いていた。天井を走っているネズミが写ると言われた、かつての笠岡の食堂のお粥よりもまだ水分の多いものであつた。そんな朝食を済ませて神邊から四里の行程を府中まで行かれた。今のように自動車も自動車がなかった。ま、ない方が結構で、あつたところで乗れないのは分かり切っている。二人は広い田圃の中をうねうねと足を進めて行つた。朝が遅かったから昼はすぐ来る。鼠粥で拵しらえた腹は、二時にもなればペコペコである。

「岡本さん、何か食べようか」

「へい、もう一寸行けばよい処があります」

又一町余り、旧長様はもうやりきれなくなつた。

「岡本さん、何か食べようやないか」

「へい。もう一寸・・・」

この時、旧長様はふと思ひ付いて

「岡本さん、これならあるで」と帯のあたりをポンと叩かれた。すると岡本氏はニコツとして、

「じゃあ何か食べましょう」

と早速その辺のうどん屋に入った。

岡本氏は当時、大分空腹の目が続いたらしい。何分部内はあつても、祭典の日なら、ものの三

人も寄つて来る処はない。氏はそういう中をグルリグルリ廻つておつとめをして歩いた。部内枝先の役員や信徒の先先まで運んだ。田圃の中で一服している信徒を相手に話したり、四里五里と運んでも先方が忙しくして居れば、通りがかりに寄つたような顔をして直ぐに次へ行く。ときにはまた三里も五里も行かねばならぬような場合さえあつた。夜道を行った事も、道で夜の明けた事も、雨のしよぼつく日、宮の拝殿に夢を結んだ事も、辻堂の軒に蚊の群れと戦つてまんじりともしなかつた事も、無論数えきれぬ程であつた。

浅野彌三郎先生が松江と大東を行き来しておたすけに奔走された事を思い出す。さてこうした中、本教は明治四十一年十一月、一派独立を果たし、神邊は支教会となつた。なつたものの、教会規定では、支教会は五百人以上の信者、教会敷地建物は教会所有である事との規定があり、岡本先生は無理して笠岡と相談の上、敷地を購入、教会新築をおこなつた。当然負債が残り、再び教会の敷地建物を抵当に入れて借金をし一時を凌いだ。が、莫大な負債額のため、元金はおろかその利子さえも払えぬ状態となつた。こうした中、後に神邊四代会長に就任する

岸本亀三郎氏の尽力を得て、十年以上に亘る負債整理は大正7年12月に終了した。この間の事情については笠岡三代会長の聞き書きがあるので、収録しておく。

この時の負債は本教が一派独立した時の負債や。その当時神邊は出張所やつた。それで支教会に改称という事になつたんやが、その当時の支庁長(岡山教務支庁長 当時中国五県は岡山教区であつた。)の諸井國三郎先生が、「神邊は普請してはいないじゃないか。神殿を普請したら、支教会の願書を受理する」という事で、岡本久作さんが、何はともあれ普請させて頂きますとお答えした訳や。それで今の教会の場所に移転して普請をしたんやが、その普請の負債が残つて、それが大正7年に整理がついたという事や。

神邊は長坂静次郎さんが二代所長やつたが、いろいろな事情ができて、途中から自分の家に引き込んで教会に出て来んようになったさかい、岡本久作さんが監督教師として行つて、やがて三代所長になつたんや。支教会になつたんやから、三代会長やな。さて、二代の長坂さんは、岸本家から亀三郎さんを養子に貰つていたんやが、どうも二人の間で折合が悪い。それで亀三郎さんは岸本姓にもどつたんや。亀三郎さんとしては神邊にいるわけにいかんものやから、大

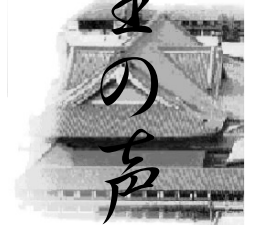
阪に出て海産物問屋に奉公して、その後独立して朝鮮に渡つて釜山で海産物の店を開いて成功したんや。成功したもんやから、ちょうどその頃の神邊の整理という上について、だんだん岡本さんや他の人も神邊から頼みに行つて帰つて来てほしいという事で、朝鮮を引き揚げて神邊の教会のすぐ北50メートルくらいの処へ自分の家を普請すると共に、そのときの教会負債整理に大分金を出したんや。それで教会の負債整理が済んだという事になる。岸本亀三郎さんが帰つて来たもんやから、笠岡の二代会長が、岸本さんを会長代理と決めたんや。岸本さんが会長代理となつてしばらくは岡本さんが会長職にあつたんやが、岡本さんは笠岡の仕事をする方が多かつた。そこで岸本さんは会長代理として神邊の教会の上に心を尽くしたという事や。

岡本先生は笠岡の理事であり、神邊の負債整理は済んだとはいへ、多忙であつたと思われる。この年、大正10年6月2日笠岡三代会長に上原繁雄が就任、翌日3日、二代会長が出直している。またこの年、10月10日教祖40年祭提唱の論達第13号が發布された。従つて神邊支教会の教祖40年祭活動は岡本久作会長のもと進められた。

(大教会理事 上原繁 道)

(この項以下次号)

修養科生の声



修養科を修了してこれから

金浦分教会 樋上謙二

今年一月二十八日、長男が出直した直後、三月十八日の五十日祭の後の六月志願の修養科を決意しました。

五月二十五日、詰所に到着してすぐに切れ痔となつて以降、八月二十六日の鼻血まで全身のあちらこちらに身上を見せられました。ダイアリーに記録した身上の数二十七回。おさづけも何回となく取り次いでいただきました。傷や痛みは癒えてすぐに直り、また次の傷や痛みを見せられるという繰り返しでした。そんな中にあつても授業やひのきしんを休まなければならぬ事態には一度も

なりませんでした。

不思議なことに二十八年前からの持病である腰痛の症状が一度も出なかったのです。こどもおちば帰り期間中の炊事本部でのひのきしんなどは、一日中重い物を運んでいましたが、腰は悲鳴をあげませんでした。

また、三ヶ月間アルコールを絶つたのは、成人になつてから、初めての経験でした。

小学校二年生のときから五年間、新聞配達をさせられ、当時は親に反発しましたが、結果として朝起きの習慣が身につき、就職してからも二時、三時起床は当たり前という状態が二十年以上続いています。長男の介護でも朝起きは当たり前でした。おかげで修養科期間中、朝起きが辛いと思つたことは一度もありませんでした。

さらに子供の年令に近い同期の修養科生とも、何とか一緒に過ごさせていただき感謝しています。

三ヶ月で体重は、約9kg減りました。でも妻からは、早くも「家に帰ってからが大切なんだよネ」



と言われています。妻の言うとおりでと思います。体重だけでなく、修養科修了後の行動が大切だと思えます。人間目標にならないよう、精進しようと思えます。

最後に大教会長様、奥様、詰所主任先生、奥様、教養掛の先生、助員の先生には連日猛暑の中、大変お世話になりました。詰所の先生方、ひのきしんの方々も、色々とお世話になりました。本当にありがとうございました。

修養科生活の感想

芦品分教会 原歩

3ヶ月という長いようで短いとも感じるほど、充実した日々を過ごすことができた修養科生活の間に父の出直しという大きな節目もみせていただきました。そして、8月23日には、自分の誕生日もあり、今までで一番多くの人々から祝っていたできました。

修養科に行くことを少しためらっていたとき、背中を押してくれたのは父でした。私の家では昔から誕生日は親に感謝をする日であったため、親からのプレゼントはもらったことなかったのですが、この修養科は誕生日に淋しい思いをさせないよう、父からの最初で最後のプレゼントだったようにも思います。

修養科生活が始まり、詰所では修養科生4人と
いう少ない人数でしたが、毎日笑いのたえない
日々でした。学校では長期ひのきしんのお守所も
させていただき、そこで出会う人々はすごく良い
人たちばかりで3日間という短い間でたくさん
素晴らしい仲間に出会えたことや修養科でしか学
べないこと、体験できないことも、本当に様々な
ことを体験させていただきました。

今後、どのような人生を送っていくかまだわか
らないことばかりですが、今回の修養科で得たも
のをしっかり生かせるよう、健康な体であること
に日々感謝しながら過ごしていけたらなと思いま
す。

修養科を終えて

恵陽分教会

藤本 幸江

妊娠5ヶ月、悪阻つわりも落ちつき安定期に入った頃、
主人の両親(教会長夫婦)に修養科を勧められ、主
人と何度も話し合い、初めての妊娠なので不安は
たくさんありましたが、今、声がかかった事に何
か意味があると思ひ、修養科へ行く事を決まし
た。

修養科中、今までは違う生活リズムに、修養
科ではじめて出会った人達との共同生活、毎日暑
い中での学校への通学、少しハードに感じる事も

ありましたが、3ヶ月間、私もお腹の赤ちゃんも、
毎日元気に無事に過ごさせていただき、神様やご
先祖様、目に見えないたくさんの方の力に守ってい
だいている事を強く感じました。

修養科の学校では毎週クラスで感話の時間があ
りました。元氣に見えても、色々な身上を抱えて
来られている方がたくさんいました。たくさんの方
のお話を聞かせていただき、健康な体がある事、
家族が元氣でいてくれる事、そして赤ちゃんを授
かれた事、元氣にお腹の中で育ってくれている事、
全て当たり前ではない、有難い事なんだ、奇跡な
んだ、という事を改めて考えさせられました。

修養科の3ヶ月間、たくさんの方の事を学ばせて
いただきました。この3ヶ月間で学んだ事を帰って
から忘れていかない様に、夫婦揃って教会に足を
運ばせていただいて、自分達に出来る事を、親に
喜んでもらえる事を、主人と一緒にさせていた
こうと思ひます。

修養科生活を振り返って

引野分教会

原田 泰子

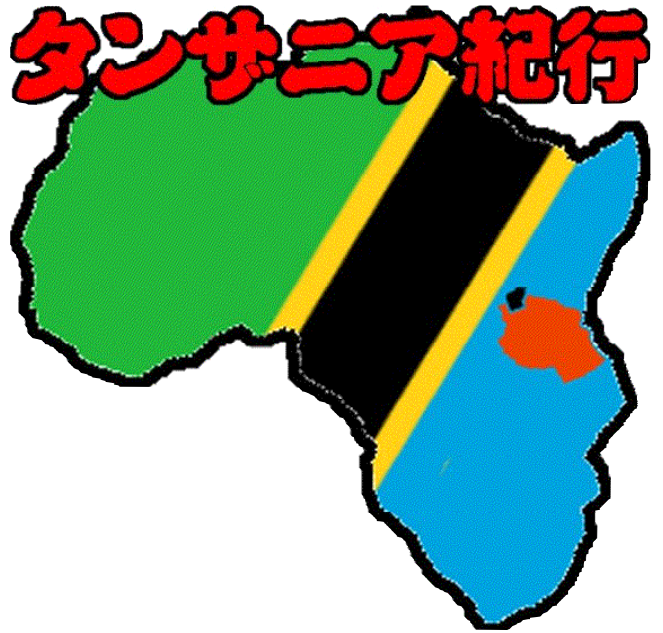
三ヶ月の修養科生活、三歳の息子と二歳の娘と
共に無事に終了する事ができました。教養の先生
をはじめ、同期の修養科生、詰所の先生方、周り
の方の理解と協力、支えがあったからこそこの事で

す。私以上に幼い子供達は本当に頑張ってくれた
と思ひます。

私自身の考えで二人を修養科へ連れていき、慣
れない生活が始まり、この二人を本当に連れてき
てよかったのかと毎日のように悩んだりもしまし
た。修養科生活の中で、日が経つにつれ皆と共に
行動する事、時間を守る事、子供たちを大人に合
わせさせる事、その難しさの中で、皆に合わせる
事が大切なのか、それとも子供の方に合わせてや
るべきなのか、この二人さえいなければ私は皆と
共に行動でき、ひのきしんなども思うようにでき
たのにと二人の子供の事を悪く思う時もありまし
た。

それでもこの子供二人がいてくれたから、私は
修養科を志願し、共に三ヶ月間を通りきる事がで
きました。教養の先生は、常に私達親子がどうし
たら修養科生活を最後まで乗り切る事ができるか
考え、支え、助け下さり、私達親子三人なりの修
養科生活の送り方をその時々で変え、教え、導い
て下さいました。

この三ヶ月で私達三人が得たものは言葉では表
す事のできないものです。修養科を終了したから
といって、自分自身の中で求めていたこたえが出
たわけではありませんが、これからゆつくりと、
自分自身、私なりの信仰を見つけていきたいと
思っております。



4. ソンゲアでのおたすけ

▼僻地の現状

タンザニアでの四日目の朝が明け、私たちは第二の目的地であるソンゲアに向けて出発した。この国の医師であるマウンガさん(志郎先生の)にをいがけによりようぼくとする)は、約八千人を超える孤児を抱える孤児支援団体NGO「オレス」を運営しており、日本から届いた支援物資を各施設へ届けている。首都ダルエスサラームから九百km離れたソンゲアにも、オレスの拠点があり、私たちがオフィスを訪問した際にも、スタッフが物資の分別作業に追われていた。聞くところによる

と、この度の救援衣料物資の多くはキロサという町に送られたとのことである。一昨年、キロサの地で大洪水が発生して多くの方々が被災したため、政府よりオレスに支援の依頼があり、物資の約八割がその被災者への支援に充てられたそうである。このようにマウンガさん率いるオレスによって、我々の送った物資が支援を優先すべきところへ効率よく届けられているようである。

マウンガさんが抱える孤児施設はタンザニア各地に点在しているが、ソンゲアにもその施設が数ヶ所ある。我々はそれらの孤児院と町の小中学校を訪れ、支援物資の残りの二割をその子どもたちに手渡すとともに、願い出た子どもたちにおさづけを取り次いだ。現地の子どもたちを取り巻く現状は厳しく、学校に通う子どもたちはみな制服を着ていたが、履いていた靴は粗末なもので、サイズの合っていないものが多かった。また、千人を超える児童数にもかかわらず、教室が十部屋ほどしかないといった状態であった。学校内ではあらゆる物品が不足しており、客として招かれた我々に椅子を差し出してくれたが、そのために教師自身が座る椅子がないといった有り様であった。このような現状を憂いて、昨年まで小学校の校長を務めていた一人の女性が、我が家で採れた農作物を売りその収益を学校に助成していると聞いた。そこで私たちは、十分な支援には満たない

とは思いつつ、教内で募った募金の中から百ドルをその女性に預けることにした。しかし孤児院に至っては、状況は更に厳しく、子どもたちの多くはボロボロの衣服を身にまとい、靴を履いている子どもはほとんどいなかった。そして寂しげな表情を浮かべて私たちをぼんやりと見つめていた。聞くところによると、彼らは八畳程度の部屋に三十人が入居して暮らしているとのことである。私たちは彼らに衣類を手渡すとともに、「元気が出ない」と訴える子どもたちにおさづけの取り次ぎを行った。人知・人力ではどうすることもできない彼らの現状に、幸福の到来をひたすらに願うばかりであった。

ソンゲアへの訪問を通じて、国の経済的脆弱さから政府による孤児院や学校の質的向上が図られず、NGOや一個人のボランティア的活動によってその一端が担われている実情を知ることができた。そして、「世界いちれつきようだい」を教えられる者として、今後のさらなる支援を誓わざるを得なかった。メキシコで布教を行っている私の義弟が、十年以上も前から海外布教の重要性や意義について熱心に語っていたが、なるほど百聞は一見に如かず、お道を信ずる者として心を大きく揺さぶられるものがタンザニアにも確かにあった。かつての日本にも多くの人々が病苦や貧困にあえぎ、救済を求めていた時代があった。そこに



小学生に囲まれて



学校にて

人助けの御教えを信ずる道の先人が、いまだ医療の進展を見ない明治・大正・昭和初期に、病に苦しむ人々にさづけを取り次ぎ、自らも食うや食わずの貧しい中、貧窮する者に親身のおたすけを行った。しかし、戦後めざましい経済発展を遂げ、欲しいものが労せずして手に入り、世界最高水準の医療を享受できるほどの社会に発展した現在の日本において、そのような状況を探し出すことは極めて難しくなった。昔のように、どうしても助かってもらいたいと純粋な心でおたすけに精を出すことの困難に、私たち道の信仰者は直面している

のではなからうか。
このような現状を思案するとき、未だに衣食住や病に困窮する世界の兄弟の救済を教祖は何よりも急き込まれ、私たちにお望み下されているのではなからうか、などと想像してみるのである。
(芳井分教会長 佐藤真孝)

立教175年 平成24年11月4日(日)

青年会笠岡分会総会

笠岡大教会

午前8時30分受付開始

午前の部

おつとめまなび
式典

午後の部

各種アトラクション
大抽選会

前へ！前へ！

TENRIKYO
SEINENKAI
KASAOKABUNKAI
<http://kasaokabunkai.main.jp/>



控 え	胡 弓	三 味 線	琴	小 鼓	す り が ね	太 鼓	拍 子 木	ち ゃ ん ぽ ん	笛	て お つ と め を ど り	地 方	役 割 区 分	講 話	扨 者	祭 主	立教百七十五年 八月月次祭 祭典役割表																							
																	中 村 義 太 郎	今 川 佐 智 子	上 原 順 子	虫 明 好 美	岡 崎 和 夫	河 原 節 喜	谷 内 伸 自	上 原 澄 雄	西 江 昌 直	上 原 浩	門 脇 郁 子	田 中 ま す み	大 教 会 奥 様	上 原 繁 道	岡 本 久 善	大 教 会 長 様	三 島 渉	中 島 誠 治	佐 藤 道 孝	河 原 節 喜	中 島 誠 治	岡 崎 和 夫	大 教 会 長 様
																	山 田 敏 教	高 木 孝 子	笹 尾 一 美	佐 藤 香 苗	岡 崎 輝 彦	中 村 道 徳	森 本 忠 善	高 木 昭 祥	今 川 昌 彦	吉 岡 誠 一 郎	森 本 富 美 子	内 海 安 子	武 内 正 美	田 中 隆 之	森 本 忠 平	中 村 剛	山 野 弘 実	笹 尾 正 治	中 村 邦 義	秋 季 大 祭 講 話	大 教 会 長 様	指 図 方	贊 者
	横 山 小 智 榮	三 島 照 美	岡 崎 豊 子	赤 木 素 嗣	田 林 久 嗣	内 海 史 郎	横 山 逸 郎	浅 野 明 教	武 内 清 明	中 村 初 美	門 脇 加 津	谷 内 美 知 子	上 原 志 郎	岡 崎 真 一	上 原 繁 道	虫 明 立 生	杉 原 博 之	吉 岡 壽	後 半																				

教会おとまり会の報告

▼葦陽隊

実施日 平成24年8月7日・8日
 参加者数 少年会員7人 育成会員3人 合計10人
 プログラム 7日 18:00 教会集合。
 19:00 夕つとめ鳴物をする。
 19:30 夕食、風呂。
 22:00 就 寝。
 8日 6:00 起 床。
 6:30 朝づとめ。
 7:00 食事、部屋のかたづけ。
 8:00 竹原の竹の館出発。
 尾道の道の駅
 尾道造船進水式を見る。
 17:00 教会着。
 19:00 おつとめ、夕食後解散。

所 感 尾道造船の進水式があったのでそれを見に行きました。初めてみる進水式に皆とてもよろこんでいました。竹原の竹の細工もよかったです。暑さでクタクタでしたが、帰ってからの夕づとめも皆まじめにつとめてくれとてもよかったです。

●別席ひのきしん団参

と き 平成24年11月23日(金) 祝日
 内 容 正午より、東礼拝場にて拍子木を入れてのおつとめ
 おつとめ後、殿外に集合。大教会長様の挨拶後、境内地にてひのきしん
 ※別席者はおつとめ終了後、別席場へ(雨天の場合、回廊ひのきしん)

<布教部>

○秋季大祭詰所受け入れひのきしん

期 間 10月25日(木) 昼~27日(土) 昼まで
 割 当 各ブロック1名

○本部食堂ひのきしん

期 間 10月1日(月)~15日(月)
 割 当 東ブロック

○本部直属特別ひのきしん

期 間 12月1日(土)~20日(木) まで
 60歳未満の健康な男子1人

<史料部>

○歴代教会長履歴を10月末日までに提出して下さい

<詰所掛>

○こどもおちばがえり期間の節電にご協力頂きありがとうございました

<教養掛>

○修養科第854期 4人(男1人、女3人) 修了

○修養科第857期 12人(男6人、女6人)

修養科生の理の親は、帰参の際、教養掛に現状をお尋ね下さい。

<青年会>

○会員名簿提出について

未提出(75か所)の教会は早めをお願いします

<少年会>

○こどもおちばがえり実行委員会会議について

期 日 10月29日(月) 12:00より
 来年の各ブロック日程調整

○教会おとまり会

実施教会は報告書を提出して下さい

<その他>

○全教野球大会について

笠岡大は10月28日(日)、熊本大教会と対戦

◎第854期修養科

自 立教175年6月1日
 至 立教175年8月27日

*教養掛

三ヶ月間 門脇元教
 (大教会役員・島根分教会長)

一ヶ月目 丸山正人
 (木津和分教会長)

二ヶ月目 浅野明教
 (大教会准役員)

三ヶ月目 佐藤真孝
 (芳井分教会長)

*修了者

金浦樋上謙二

引野原田泰子

芦品原幸江

惠陽藤本幸江

◎教人資格講習会修了者

立教175年9月10日終講

西村藤本久美

大教会だより

八月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいませ

親神天理王命の御前に 会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には 一列子供が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思召のままに 天然自然のお働きを通して日々自由の御守護を賜ります中に 秋とは名ばかりの残暑厳しき中とはいへ 時折吹く涼しい風 夜毎に虫の音の高まりと共に涼しさが増し 少し秋の気配を感じる時節となり 身体にも心にもやさしさを感じつつ 日々結構に恙なく生活させて頂いております事は誠に有難く勿体ない極みでございます

私共は日々朝に夕に御礼申し上げると共に 御恩報じを思い念じてひのきしんに励みおつとめを通して理作りしにをいがけおたすけを通してたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております

その中にも今日の吉日は理のお許しを戴いた八月の月次祭を執り行う日柄でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同喜び心も一入に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます 御前には残暑厳しき中も厭いませず 親孝心一筋に寄り集い 言改めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいませようお願い申し上げます

さて今年のごどもおちばがえりは連日の猛暑日ではございましたが 笠岡からは一千四百名程の方々におちば帰りして頂くことが出来ました 心配していた熱中症や事故怪我等もなく喜び一杯の一時を味わう事が出来ました 加えて少年ひのきしん隊にも例年より多くの子供達が参加することが出来ました 又引き続きの学生生徒修養会として大教会での英語講習会でも昨年より多くの子供に参加して頂きにぎやかに勤めさせて頂きました 誠に有難うございました 又明日より三日間サマーキャンプも行いますので宜しくお願い申し上げます

更には又 教祖百三十年祭が近づくにつれおつとめ奉仕人増員が気に掛かります この旬に改めて百二十年祭の時の人員を確認し よふぼく一人ひとり所属する教会のおつとめ奉仕人増員の為には何が必要か そして何が出来るかを思索し実行して行く所存でございます 九月はにをいがけ強調月であり月末は全教一斉にをいがけデーでもありますので 出来ることの一つとして取り組みたいと存じます

何卒親神様には 世界一列を救きたいとの親心に添うべくたすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上なたすけの理をお現し下さり 人々が真の親心に気付き御恩報じを願う人々が増し 救け合の理が広まって お望み下さる陽気づくめの世の状に一日も早く立て替わりますようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます



この夏、嬉しかった事書いちゃいました。

夏といえば「ごどもおちばがえり」この「おじよばがえり」に姪っ子が家族四人で参加！おちばに帰って来てくれました。姪っ子は現在フランスのパリで暮らしています。夫婦共働きで大変な中、コッコツ何年もかかって「おちばがえり」の費用を貯めて帰って来たのです。もちろん夫婦揃っておみちの御用の上にも頑張つて勤めて、ヨーロッパ出張所にはほとんど日参を欠かさず、なにか事あるときには夫婦で勤めさせて頂いている様で、今回もおちばがえりの時、真柱さまに偶然お会いした時、真柱さまから、「帰ってきたのか！一緒に写真を撮ろう」とお言葉をおかけ頂き喜んでいました。それも、真柱さまヨーロッパ御巡教の時夫婦でひのきしんさせて頂いた事を真柱さまが覚えていてくださったからだと感じた事です。

6歳になる息子が、「こんなに楽しかった事ははじめてだよ！母さん！」と言ったとの事、本当に嬉しいことでした。

姪っ子談、「おじちゃん、子ども達が毎年帰りたいたい言い出したらどうしよう？」・・・たしかに・・・嬉しいこと書いちゃいました。

(K・T)